

「最後の細菌の狩人」の野口英世

前坂 俊之

(静岡県立大学国際関係学部教授)



夏目漱石に代わって千円札の肖像画になった野口英世ほど、世界の偉人として教科書、児童本によく登場した人物はいない。ただし、その世界的な医学の業績もその後、否定されたものが多く、その天才、超人的な努力家とは裏腹の借金癖、結婚詐欺、ストーカーなど変人的な人格とあいまってこれほど評価の分かれる人物も少ない。

野口は 1876(明治 9)年 11 月、福島県耶麻郡翁島村(現、猪苗代町)で極貧の農家の子として生まれた。父親は生活能力がなく、しっかりものの母親に育てられたが、1歳5ヵ月の時、その母親が目を離したスキに囲炉裏に転落して、左手に大ヤケドを負い重度の障害が残った。

成績優秀だったが、貧乏の上、「手棒(てんぼう)、手棒！」と回り子供から、いじめや迫害を受けた。この屈辱が成功へのバネとなった。

十六歳の時、同級生や先生らのカンパで左手を手術し直ったが、この経験から医者になって人々を救いたいと、わずか二十一歳で教員免許を取得した。1898年(明治31)に北里伝染病研究所につとめたが、学閥に凝り固まった医学界に絶望、遊蕩にふけり多額の借金(今に換算すると2億円以上)をこしらえ、研究所におられなくなり、海外での活躍を夢みた。

1900(明治 33)年、24歳で、来日のさい通訳をつとめたペンシルヴァニア大学の教授フレクスナーをたよって米国へ渡った。突然やってきた野口に驚いた同教授は親切な人で助手にやとわれ、毒蛇の毒成分の研究を手がける事になった。

野口は「日本人はいつ眠るのか」「実験マシーン」と回りから評判になるほど、不眠不休で文献調査や血清療法の実験に取り組み驚異的な実績を上げた。

当時の世界の細菌学者は梅毒の病原菌を必死で研究していた。04年、フレクスナーの助力によってロックフェラー医学研究所員となった英世は梅毒の病原体の正体スピロヘータの純粋培養を世界に先駆けて成功して、一躍、名をとどろかせた。(ただし、現在では英世の提唱したスピロヘータの実験で再現できず誤りとされている。)

さらに精神病患者の一部の脳や脊髄液の中に、梅毒スピロヘータが増殖している事実をつきとめた。これらの成果でノーベル賞の候補者にも上げられた。

野口は約二十七年間の研究生活で研究論文は計二〇四本。年平均7・3本でアメリカの平均的な研究者の7倍にのぼる超人的な生産ぶりで、梅毒スピロヘータの純粹培養に成功した1913年には年間で実に一〇九本を書くという猛烈ぶり。

「努力だ、勉強だ、それが天才だ。だれよりも三倍、四倍、五倍勉強する者、それが天才だ」。これが野口の口癖で、自らも実践したのである。

このころ、有名になった英世に会いたいと研究室を訪れる日本人がひきもきらず、研究の時間を割かれるのを嫌った野口は日本語を使わず英語で応答して、相手を退散させた。これも野口への日本人の評判を落とす一因にもなったが、日本の医学界は最後まで英世には冷たかった。

米ロックフェラー医学研究所員の花形研究員となった野口は次は「西半球の恐怖」と恐れられていた黄熱病に挑戦した。

黄熱病は中南米、米国の南部を中心に世界的に猛威を振るっていた伝染病で、米国の威信をかけて送り込まれた野口は死を覚悟して、南米エクアドルに出張して、わずか10日間で現地の患者の血液から発見された微生物レプトスピデを病原体であると発表、大評判となった。米メディアは野口を「医学界の英雄」とたたえ、再びノーベル賞の候補者になった。(しかし、これも完全な誤りとその後わかった)

1925年(大正14)アフリカの黄熱病研究のために西アフリカへ出かけたが、現地で黄熱病に感染し、1928(昭和3)年5月、53歳の若さで亡くなった。世界の新聞は「科学の殉教者」「平和の英雄」「野口の教訓」と最大限の賛辞を呈しその死を惜しんだ。

細菌学からウイルス学へパラダイムシフトしていた当時の医学界で野口は「最後の細菌の狩人」と呼ばれた。

世界中の医学者で誰が1番発見するか激烈な競争が展開され、野口が世界新を何度かマークした英雄であったことは事実だが、現在ではその研究成果の大部分は否定されている。電子顕微鏡のなかった時代に必死で幻のウイルスを追いかけた悲劇の天才医学者だった。

月刊歴史読本連載 <禁転載>

